

二〇二六年度 一般選抜 学力検査(国語)

現代の国語、言語文化  
(古文・漢文を除く)

解答番号

1

〜

28

一

問題文を読んで後の問1～問9に答えなさい。

著作権の都合上、省略。  
閲覧を希望の方は、名古屋外国語大学入試広報室で閲覧可能です。

二 問題文を読んで後の問1～問9に答えなさい。

人間が共食をするのは、人間が社会的な動物で、家庭を営むと同時に、集団という単位のなかで生活をしているからです。この問題を少し考えてみましょう。

家族という問題を考えるには、やはりまた人間以前の哺乳動物、なかでも霊長類の集団生活に立ち帰る必要があります。なぜ人間にだけ家族が生まれたのか、という問題です。まず考えるべきは、大量絶滅で爬虫類が滅びたのちに、新たに出現してきた哺乳類は、卵生ではなく胎生という戦略を選んだ、ということなのです。

つまり卵のように一度にたくさんは産まずに、少ない子供を胎内で確実に育てます。とくに霊長類は、原則として一回に一子しか産みませんから、これを大切に成長させるためには、自立するまで親が食事の面倒をみなければなりません。もちろん霊長類は、一对のオスとメスを基本とするのではなく、さまざまな集団を形成しますが、なかでも彼らの食事行動のうちで、人間と大きく異なる点に注目しなければなりません。

彼らは、女系集団で母乳を積極的に与えながら子供を育てますが、基本的に食事は個体単位の行動で、集団で動いていても、食べ物は得た場所で消費してしまいます。ところが人間は、完全な二足歩行という行動様式を手に入れたために、彼らよりもはるかに広範囲に動き回り、さまざまな食べ物を集めて、仲間のもとへ持ち運ぶことが可能となりました。

もちろん哺乳類や鳥類も、子供のところへ食物の一部を持ち帰りますが、それは基本的に一時的なものにすぎません。つまり **X** な家族を形成しない人間以外の動物は、やはり個体単位の採食法が食事行動の基本なのです。

しかし人間は家族内や集団内での分業を前提として生活するため、食物を獲得した場所で消費せずに、ベースキャンプに持ち帰って、家族や集団を単位として共食をする、という特徴があります。こうした問題については、霊長類社会学者・山極寿一やまぎわしゅいちさんが、くわしく論じていますので、その成果によって、要点を押さえておきたいと思えます。

類人猿のなかでも、チンパンジーやボノボは、人間と同じように食物を分配します。 I こうした分配行動が生活の前提と

なると、単に力の強い者が食物をつねに独占するわけにはいきません。それぞれの個体間での複雑な関係のなかで、食物を分け与え合うことが、彼らの暗黙のルールとなるからです。 II ただ類人猿は、食物の物乞いを受けた場合にのみ、その所有者が

分配という行動をとります。 III

ところが人間の場合には、類人猿と明確に異なっており、相手に乞われなくても、自ら食物を与えるところに特徴がある、とされています。基本的な霊長類は、集団で生活することにより、自らの生活を守り発展させてきました。 IV なかでも人間は、オ

スとメスが持続的な配偶関係を保つと同時に、オスを中心としたさまざまな集団に属することで、食物などを手に入れる社会を形成してきました。

つまりオスたちが集団で獲得してきた食べ物を、メスや子供たちに当然のこととして分配する、というシステムを持っています。まさに相手に乞われなくても、つねに食物を分配すべき最小の単位として、家族を形づくるということになります。 V

これについては、動物的運動能力の限界から、人間は集団的な社会性を高めることによって、大型獣の捕獲が可能となりました。それゆえ、家族の主要な食物獲得者となるオスたちによって、狩猟のための集団が編成されることとなります。これは当然のことながら、ベースキャンプでまつ家族の分もふくめて、獲物の肉を分配することが前提となります。

こうして人間は、一対のオス・メスを中心とした家族という単位集団を基礎とするともに、同時にさまざまな複雑な集団を構成して、それぞれにアイデンティティを維持しつつ生きていきます。しかも、その最も基本的な活動としては、 Y に中心がありましたから、仲間たちあるいは家族と一緒に食事をする<sup>(2)</sup>こと、つまり共食が不可避な行為となるのです。

そして、そこでは舌が重要な役割を果たしました。乞われなくても、その食物を分け与えるべきか否か<sup>い</sup>、をオスたちは舌で判断しなくてはなりません。つまり集めた食べ物の味覚を確かめた上で、食物の分配を行い、一緒に食事をとるのです。それゆえ食物の獲得や処理のスタイルによって、それぞれの集団に共通する文化が生まれました。

ところで言語自体は、舌の自由な使用を前提として生まれたものです。さらに狩猟などの集団行動や知識・技術の伝達に、言語は不可欠でした。むしろ言語の使用によって、高度な集団生活を営み、社会性を高めることが可能となった、と考えねばなりません。

**A** 結果的にも、仲間たちの間には、同じような味覚の体系が共有されることになりました。まさに舌による共通の味覚の確認が、彼らのアイデンティティとなり、それを得るための文化体系が、その集団の共通性を形成したからです。つまり共食は、集団としての結びつきを確認しつつ、これをより強固にすると同時に、その社会性を高める働きをしている、とみなすことができます。

やや抽象的な話になったので、少し具体的に共食の意味について考えてみましょう。最もわかりやすい日本語として、同じ釜の飯を食う<sup>①</sup>という表現があります。いうまでもなく親しい人間関係にあることを意味します。同じ釜で炊いた飯を食べる、ということは一緒に食事をする、**B** 共食という行為が、親密さの表現となっているのです。

しかも、これは毎日食事をともにする家族には用いず、それ以外の人間でも、とくに近い関係にある場合に使います。家族以外の人間との距離が、共食という尺度によって測られることとなります。しかも家族をつくろうとする男女が、出会って親しくなれば、デートの際に一緒に食事をしますが、これはきわめて自然なことなのです。

同じ場所で同じようなものを、ほぼ同時に体内にとり入れるということが、二人を親密にさせる最も重要な行為なのです。そして、めでたく結婚となった場合、式の重要なセレモニーの一つとして、二人で同時にさかずき盃を交わし合う三三九度があります。これによって、二人は心を同じくした、という盟約を果たしたことになるのです。

さらに、それを親族や友人たちが認めるために、ヒロウエンヒロウエン<sup>②</sup>という場を設定して、新郎新婦を囲んで全員一緒に食事をします。結婚式に限らず、さまざまな儀式の際には、かならず食事が供されます。これは、その参加者が共食によって、心を同じくすることを意味します。もちろん食事はおいしく楽しくありますが、そうした雰囲気は共有するだけでなく、同じ食べ物を、それ

それぞれの体内に取り入れることで、みんなが一体感を覚えるのです。

こうした共食の意義は、人間の起源と同じように古いものでしょうが、これを日本の歴史的に確かめてみましょう。『日本書紀』<sup>(3)</sup>には、六世紀に起こった磐井の乱に関する記述があります。筑紫の国造とされる磐井氏が反乱を起しますが、その鎮圧を命じられた大伴金村は、磐井の知人でした。金村は、任務ゆえに磐井を殺しますが、その時に昔を思い出し、磐井とは、かつては同じ食器で食事をした仲であつたことを強調しています。

**C** 同書の雄略天皇一四(四七〇)年一〇月一七日条には、共食者に関する記事があります。これに關しては、異国からの使者を迎えた時に、これをセツタイする役目で、『延喜式』治部省には、共食者二名を置くことが定められています。

これは単なる饗応ではなく、言葉の通じにくい外国人に対し、一緒に食事をするということで、おたがいの心を通じ合わせるための外交儀礼なのです。国や言葉を異にしても、また初対面であつても、まさに共食という行為が、ソウホウの意思を疎通させる、と古くから考えられていたことを、如実に示すセレモニーなのです。

(原田信男『食べるって何？食育の原点』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

(注1) 磐井の乱——五二七年に朝鮮半島南部に出兵しようとした大和朝廷軍を、磐井氏が妨害した乱。

(注2) 大伴金村——古墳時代の豪族。

(注3) 延喜式——平安時代に編纂された律令の施行細則をまとめた法典。

(注4) 治部省——律令制における八省の内の一つ。

問1

傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
15  
17

(配点6点)

(ア) ヒロウエン

15

- ① ケーキの作り方をジツエン<sup>ア</sup>して見せた。
- ② この人は私の母方のエンジャ<sup>ア</sup>です。
- ③ 体育祭のオウエン<sup>ア</sup>ダンの団長に立候補する。
- ④ 新年を賀してシユクエン<sup>ア</sup>が催された。
- ⑤ エンドウの観衆の拍手が選手<sup>ア</sup>の励みになる。

(イ) セツタイ

16

- ① 逃げだした犯人を警察官がタイホ<sup>イ</sup>した。
- ② もうすぐ来る出番に備えてタイキ<sup>イ</sup>している。
- ③ 会社のキュウタイ<sup>イ</sup>依然の体制を批判する。
- ④ 国王のタイカンシキ<sup>イ</sup>に列席する。
- ⑤ タイレッツ<sup>イ</sup>を乱さないように注意する。

(ウ) ソウホウ

17

- ① 彼らは日本画界のソウヘキ<sup>ウ</sup>をなしている。
- ② 引越し前日は上を下へのオオソウドウ<sup>ウ</sup>だ。
- ③ バーゲンセールでは商品のソウダツセン<sup>ウ</sup>になる。
- ④ 全員でソウサ情報<sup>ウ</sup>を共有して行動している。
- ⑤ 中学からずっとスイソウガク部<sup>ウ</sup>に入っている。

問2

空欄

X

解答番号は、

18

・

19

。

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(配点6点)

X

18

- ⑤ 慢性的
- ④ 多目的
- ③ 理想的
- ② 恒常的
- ① 一時的

Y

19

- ⑤ 生存本能
- ④ 集団行動
- ③ 採食行動
- ② 生活の安定
- ① 大型獣の捕獲

問3

空欄

A

く

C

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①く⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、

20

く

22

。

(配点6点)

A

20

- ① それゆえ
- ② ところが
- ③ しかも
- ④ もしくは
- ⑤ 要するに

B

21

- ① つまり
- ② しながら
- ③ そのうえ
- ④ 一方で
- ⑤ ただし

C

22

- ① さて
- ② ともすると
- ③ さらに
- ④ たとえば
- ⑤ だから

## 問4

次の文は本文の一部であるが、文中の I ～ V のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。

(配点3点)

そして最も効率よく、こうした家族や集団を養いうる食物は、いうまでもなく大きな動物の肉でした。

- ① I      ② II      ③ III      ④ IV      ⑤ V

## 問5

傍線部(1)「霊長類は……さまざまな集団を形成しますが、なかでも彼らの食事行動のうちで、人間と大きく異なる点に注目しなければなりません」とあるが、次に挙げる食事行動について、人間のみに当てはまる食事行動はどれか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、24。

(配点5点)

- ① 親が子供の食事の面倒を見ること。  
② 子供を母乳で育てていること。  
③ 食べ物を得て、子供に持ち帰ること。  
④ 獲得した食べ物を分配すること。  
⑤ 家族や集団を単位として共食をすること。

問6

傍線部(2)「ここでは舌が重要な役割を果たしました」とあるが、筆者の考えている舌の役割とはどのようなものか。その説明として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

25。

(配点6点)

- ① 食物の味の確認と食物分配の判断。
- ② 共食による集団の文化の創生。
- ③ 言語を使った集団行動や知識・技術の伝達。
- ④ 食物を得るための運動能力の向上。
- ⑤ 味覚の体系の共有。

問7

傍線部(3)「共食の意義」とあるが、共食にはどのような意義があるのか。本文中に挙げられている具体的な例として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

26。

(配点6点)

- ① 家族とともに食事をする頻度で、家族の親密さを表す。
- ② 同じ場所で同じようなものを同時に食べることで、親密になる。
- ③ 結婚式の三三九度で、心と同じくするという盟約を果たす。
- ④ ささまざまな儀式の際に参加者が共食することで、親近感がわく。
- ⑤ 食事中の雰囲気共有することで、みんなが一体感を覚える。

## 問8

傍線部(4)「共食者」あえたけびととあるが、この「共食者」の役割とはどのようなものか。筆者の説明として最も適当なものを、次の

①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 27。

(配点6点)

- ① 異国からの使者との会食の際に、彼らとともに食事をするだけの役割。
- ② 異国からの使者の言い分を、饗応の席で間違いなく伝える役割。
- ③ 異国からの使者に対して、心を込めて食事の世話をする役割。
- ④ 異国からの使者と食事をし、互いに打ち解け合うように取り計らう役割。
- ⑤ 異国からの使者に対して、もてなすことでこちらの意思を伝える役割。

問9

筆者の主張に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

28。

(配点6点)

- ① 人間は、他の類人猿と同じように食物を相手に乞われなくても分配し、共食をすることで親密さを確認し、絆をより強固にしてその集団の社会性を高めている。
- ② 人間は胎生で子供を産み、大切に育てるためにメスを中心とした集団が編成され、その集団に属することで、これまでの個体単位であった食事が共食に変わった。
- ③ 人間は食物を手に入れるために家族という集団を編成し、そこでの共食を通して、その集団の共通性を強固にし、社会性のあるものにしてきた。
- ④ 人間はさまざまな集団を構成して生きているのだが、その中心となっているのは共食であり、それによってその集団の絆が強くなり、社会性が高まっている。
- ⑤ 人間は、国や言葉を異にしても共食という行為をすることで相手を自分たちと同じ仲間だと理解し、集団に受け入れ、その集団をより強固にしてきた。